

国立国語研究所学術情報リポジトリ

東京と大阪の談話におけるあいづちの種類とその運用

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): back channel items, reduplication, intonation, dialectal variations, sociolinguistic factors 作成者: ナガノ・マドセン, ヤスコ, 杉藤, 美代子, NAGANO-MADSEN, Yasuko, SUGITO, Miyoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002007

東京と大阪の談話におけるあいづちの種類とその運用

ヤスコ・ナガノ・マドセン

(音声言語研究所) (スウェーデン, ヨテボリ大学)

杉藤 美代子

(音声言語研究所)

キーワード

あいづち, 反復形, イントネーション, 方言差, 親疎の関係

要 旨

日本語の談話におけるあいづちの種類やその運用の実態を把握するために、東京（山の手、下町）および大阪（船場、河内）で収録された中・高齢者による座談の音声資料に現れたあいづちを分析し、考察を行った。

まず両方言であいづちとして使われたことばを調べ、一見多様にみえるあいづちの表現形式には反復による類型規則に従うものが多いこと、またその規則性は、基本周波数曲線（ピッチ曲線）にも認められることを明らかにした。次に、反復形を持つあいづちの表現形式は東京と大阪の両地域において違いがなく、表現形式にみられる方言差、地域差、男女差、丁寧度の差などは、「アソーデスカ」系のような反復形を取りにくいあいづちにみられた。あいづちの種類に関しては、ほとんどの話者が8～11種のあいづち系を持ち、それを親疎の関係や男女差などの要因により使い分けていることが明らかになった。

1. はじめに

日本語はあいづちを多用する言語といわれており、現在までに日本語教育への応用や他言語との比較をはじめとして、幅広い角度から日本語におけるあいづちの実態が考察されている（水谷1984、メイナード1987、その他詳細は堀口1991）。また言語表現としてのあいづちだけでなく、笑いやスマイル、うなずき、首ふりといった非言語的あいづちの研究（江川1987a、米田1987、杉戸1989）、また音響的分析の結果に基づいてあいづちのタイミングなどを検討した例もある（杉藤1987、1993）。

しかし日本語の談話におけるあいづちの種類や頻度、およびその運用の実態を考察したものは意外に少なく、まだ断片的な見解が出されているのみである（水谷1983、小宮1986）。また方言のあいづちを扱った研究（黒崎1987）はあるが、方言差を前面から取り上げた研究や、あいづちのイントネーションを観点に入れた研究はまだ着手されていない。

そこで本稿では、ごく自然な約1時間の会話の流れが収録された貴重な音声資料4種を材料として、日本語の2大方言東京と大阪の談話にみられるあいづちを調べた。まず、あいづちの表現形式の特徴を考察し、今までほとんど取り上げられなかった音声的な観点を中心にした分類を試

み、中でも特徴的な反復形を持つあいづちに注目して分析を行った。また各種あいづちの頻度とその運用の決め手となる要因を考察し、方言や諸外国語との比較をも含めた体系的なあいづち分析への土台を築くことを目的とした。

2. 資料およびあいづちの定義

2.1. 音声資料について

資料として用いたのは、国立国語研究所の研究プロジェクトの一つとして、収録内容、方法および環境を統一し、各地域生粋の話者の選択、収録場所の決定など、前もって十分に検討、準備され、録音・録画された貴重な談話資料である。筆者の1人杉藤がかつてこの研究に参加して得られたものであり、詳細については江川(1987b)ならびに杉戸、磯部(1987)を参照されたい。

東京（山の手と下町）と大阪（船場と河内）4グループの、中・高年話者による座談の録音テープを材料として、これに文字化資料も参照した。これらの資料のうち東京下町と大阪船場の2グループの談話についてはすでに杉戸(1987)による「あいづち的な発話の現れかた」、および「話題に関わる語のうけつぎ」に関する詳細な論考がある。また、杉藤(1987)は大阪船場の談話について各発話とポーズの持続時間を実測して、あらたまった場面ではあいづちの前に短いポーズが入り、親しい間がらでは声が重なるその実態を明らかにした。これらの談話が録音されたのはおよそ20年前であるが、現在聞いても違和感がなく、地域的にバランスがとれ、録音の質や量においても得難い資料である。今回手つかずであった音声資料を含め、あらためて分析の対象としたものである。

各座談の話題は共通で、各地域についての思い出話であり、メンバーはそれぞれの地域の生粋の方言話者4人と司会者を含めた5人である。表1にはその構成メンバーの年齢、親疎関係、座談会におけるトピックの推移などをまとめた。分析時間は各グループとも、座談の開始から45分間前後とし、合計約3時間であった。これら4種の音声資料についてあいづちを聴取により抽出し分析を行った。

2.2. あいづちの定義と資料の意義

本稿ではあいづちの定義を次のように定めた。つまり相手に対する応答の中で、質問や命令に答えたものや実質的な内容を含む発話ではなく、単に「聞いている」、「わかった」、「それからどうなった、もっと聞きたい」などの意思を表明することによって、対話を円滑に進める機能を持つ言語形式をあいづちとみなす。また同様の機能を持つ、うなずき、笑い、身振りなどの非言語的行動も広義のあいづちとみなすが、本稿では「声に出した笑い」のみを分析の対象に含めた。ただしその中でも、爆笑のようなものはあいづちとはみなさなかった。このようにあいづちと定義されたものの中には、積極的な興味や賛成、あるいは感嘆のニュアンスを持つものから、反対にいくぶん懐疑的、やや否定的なものまで、幅広い種類のものが含まれる。ただし、発話に対して聞き手が疑念を持ち反論すれば、それはあいづちとはいえない。これによって話の内容に変化が生じるからである。ここで扱う資料の内容は思い出話であり、内容に片寄りがあるが、この資

料のように数種の統一されたごく自然な多人数の談話の収録は容易でなく、生き生きとした談話が進行するこの音声資料は、あいづちの本質を探るうえでは好材料である。

表1 各グループの構成他（Mは男性，Fは女性，かっこ内の数字は録音時の年齢）

	東 京		大 阪	
	山の手グループ	下町グループ	船場グループ	河内グループ
地域の話者	M 1 (66) M 2 (65) F 1 (68) F 2 (68)	M 1 (76) M 2 (68) F 1 (71) F 2 (67)	M1(全員60-70代) M2 M3 F 1	M 1 (45) M 2 (48) M 3 (47) M 4 (44)
司会者 (出身地)	男性SS (名古屋)	男性SS (名古屋)	男性OM (名古屋)	女性MS (東京)
親疎関係	男性同士，女性同士は幼なじみであるが，両ペアは座談会で初対面	男性同士，女性同士は幼なじみであるが，両ペアは座談会で初対面	F 1 と M 3 は夫婦メンバーは全員知り合い	全員初対面
分析時間	44 分	43 分	45 分	45 分
トピックの推移	司会者の導入 自己紹介 学校の話 言葉づかい 縁日 山の手と下町 学習院言葉 他	司会者の導入 言葉づかい 駒形，本所 七曲がり 夜釣り 洪水 桜餅 他	司会者の導入（途中で故意に中座） 船場のことば 電車の開通 人力車 巡航船 電燈 他	司会者の導入 自己紹介 八尾の周辺 六万寺 長瀬の用水路 農家の暮らし 子供のころ 他

3. あいづちにみる表現形式の分析

上記のように定義されたあいづちを録音テープを聞きながら文字化資料ともつきあわせて抽出した。抽出されたあいづちの使用数は2870であった。ここではまず日本語のあいづちの表現形式の特徴を分析する。

3.1. 反復形にみる規則性

あいづちの具体例をみると「シー」「シーシー」「シーシーシー」のように，基本形を単純に反復したものが多い。そこで，ここではまずあいづちの表現形式にみる基本形の構成音に従ってあいづちを11種に分類した（構成音による分類では小宮（1986）が「ア」「エ」「ン」「ハ」の4種の分類をすでに試みている）。さらに反復形の有無によりそれらを「反復形を持つあいづち」（表2-1）と「反復形を取りにくいあいづち」（表2-2）の2つにまとめた。

表 2-1 反復形を持つあいづち

グループ名 あいづち の系統		東 京		大 阪		司 会 者 (4つの座談会の合計)
		山の手 グループ	下 町 グループ	船 場 グループ	河 内 グループ	
規則的に反復	① ンー ウン フン	ン, ンー, ンン	ン, ンー, ウンウン, ンーンー, ンーンーンー	ウン, ン, ンー, ウンウン, フンフン	ウン, ン, ンー, ンンン, ンンンン	ン, ンー, フン, ンン, ンーンン, ンンンン, ンーンンン
	② エー	エ, エー, エエ, エエエ	エ, エー, エーエー, エーエーエー エー	エ, エー, エエ	エ, エー	エ, エー, エエ, エエエー, エエエエ
	③ アー	ア, アー, アアアア	アー, アーアー	ア, アー, アア, アアー, アーア, アーン, アアアー	ア, アー, アーアー	ア, アー
	④ ハイ ハア	ハイ, ハア, ハイハイ, ハアハア, ハアハアハア	ハア, ハアハア, ハイハイハイ, ハアハアハア ハア	ハイ, ハア, ハイハイ	ハイ, ハイハイ, ハアハア	ハイ, ハア, ハアハア, ハイハイハイ, ハアハアハア, ハアハアハアハア
	⑤ ソー	ソ, ソソソ, ソソソソ, ソーソーソー ソー, ソソソソソ	ソー, ソーソー, ソーソーソー, ソーソーソー ソー, ソーソーソー ソーソー	ソー, ソーソー, ソソソ, ソソソソ	ソ, ソー, ソソ, ソーソー, ソヤソヤ, ソソソ, ソーソーソー, ソソソソ	ソー, ソソ, ソーソ
	⑥ 笑い	省略	省略	省略	省略	省略
不規則な反復	⑦ ハへ ホ	ホホー	エーッ, へー, ハーッ, ホーッ	ハーン, ハハーッ, フーン, フンフン, へー	ハーッ, ハハーッ (ン), ハッハー, ハハーッハア, ハーッハハハ, ホーッ	ハーッ, ハーン, ハハーッ, ハッハー, へーエ, ホー, ホホー

表 2-2 反復形を取りにくいあいづち

グループ名 あいづち の系統	東 京		大 阪		司 会 者 (4つの座談会の合計)
	山の手 グループ	下 町 グループ	船 場 グループ	河 内 グループ	
⑧ ネ	ネ, ネエ	ネ, ネエ	ネエ, ナ	ネエ, ナ, ナア	ネ, ネエ
⑨ アソーデスカ	アソーデスカ, アソーデゴ ザイマス (マ ショー) (カ, ネエ), アノソノヨー デゴザイマシ タケドネ, ハイソーデゴ ザイマス (カ, ネエ), アソーデラッ シャイマスカ, アソーデショ ーネ, アソーデス (カ,ネ,ヨネ), ソーデス (カ, ネ,ヨネ), ソーデショー ネ, ソーカシラ, アソーダッタ, アソーカ, アソソソ, アナンカソー, アソースカ, ソーナ, アソ, ソーナノ, ソソー, ソーネ	アソーデスカ, アソーヨーデ スカ, ハアサヨデス カ, サヨーデゴザ イマスカ, アーサイデス カ, ソーデスネ, アソーデス カ, アラソーデス カ, ソーソーデス (ネ,ヨネ), ソーデス (ネ, ヨネ), ソーデショー ネ, ホーデスカ, ソーデショー, アソー, エーソー, アソーネー, ソーネー, アソーヨー, アソーカ, ソーカ, ソーダ, ソース, ソーナノヨ	アソーデッカ, アラソーデッ カ, ソーデンナー, アソーダガ, アソーデスカ, アソーデショ ー, アソーカ, ウンソーソー	アソーダッカ, アソーソナモン ダッシャロナ, ダッシャロナ, アソーデッカ, ソーデッカ, アソーデンナ (ガナ), マアソーデンナ (ネ), ハイソーデス, アソー, アソヤロネ, ソーカ, ソーナ, ソーヤ, ソソマソ, ソーダナア, ダッカ, ダンナ, デンナ, デッシャロナ	アソーデスカ, アソーデス (カ, ネ), マソーデシタカ, ソーデス (カ,ネ), ソーダソーデスネ, ダソーデスネ, ソーナンデスカ, アソー, ソーネ, ソースネ
⑩ 繰り返し	松岡様とね, 伊勢丹あたり はね, 向島の方, 終点でござい ましたね, 1911年…, 大学だけ	あまだ…, 話し方ね, あ一本願寺, …ですね, 数寄屋橋…, 震災に遭わな い, 有名ですね	若林…, 地滑りだんな, 大正…, 脱げとはいわ ず…, 船場島之内, 格が高かった んです	なわて村だ, あー正行のあれ, 六万寺ちゅう, 四条な, えー広うてな, にごしことばだ んな, あー堺	蔵前橋…, 山際ですよ, 正行のね, 青山塾…, 船の舵…, 変わりましたね, トタンを, 池の島と
⑪ その他	イヤーツ, (アー) ナル ホド,	マツタケネー, ホントデスネ ー, アーヤッパリ	ヤ, イヤ, イエ, ソリヤー	アーヤッパリ, アドーモ, イヤ, ホンマダナア	ハハーッナルホド, アーラ, ネーホントニ

反復形を持つあいづちは、①「ソー」②「エー」③「アー」④「ハイ・ハア」⑤「ソー」である。これらのあいづちでは、「ソソソ」「ソーソーソー」のように長短どちらの形式でも現れているが、伸ばしたものの方が一般的であった。①「ソー」については撥音に似たものの他にも母音の「エー」との中間であるような発話も稀にあり、厳密に区別できにくいものも含まれる。また「ン」や「ソー」と「ウン」の違いにも、境界がややあいまいなものが含まれている。

⑥「笑い」も反復形を持つあいづちの表現形式として扱った。資料にみられた笑いは最低でも「ハハ」「ヘヘ」のように2回の反復であり、通常は6～8回と反復の回数が上記の「ソー」「エー」などより多かった。今回の資料には単一の「ヘッ」など否定的なあいづちは観察されなかった。上記のように反復形を持つあいづちの他に、「ハーッ」「ハッハー」「ホーッ」「ホホー」などのように変則的な反復形を持つあいづちがある。これらは感嘆や驚きを表すあいづちで、構成音は狭母音を含まないハ行音のものが中心になっているので⑦「ハヘホ」系としてまとめた。

表2-1のあいづちのように、規則的あるいは変則的に反復形を作るものと異なり、通常は反復形として発話しないあいづちも幾種かある。それは表2-2にまとめた⑧「ネ」、⑨「アソーデスカ」また前の発話の⑩「繰り返し」および⑪「その他」のあいづちである。

⑧「ネ」系は終助詞の「ネ」「ネエ」で、大阪では「ナ」「ナア」になることが多い。このあいづちは「ソーデスネ」や「ホントデスネ」を省略したものとも考えられ、次のような場面で使われていた。

M4 「今もうあれあらしまへんがな」

M3 「ナ」

(河内グループ)

⑨「アソーデスカ」系には「そう」という指示詞の前後にいろいろな要素が加わったものをすべて含めた。この場合「アソーデスカ」や「ハイソーデスカ」を1個として数え、「ア」や「ハイ」と「ソーデスカ」に分けることはしなかった。

⑩「繰り返し」は、次の例にみるように相手の発話の一部、または全部をおうむ返しにしてあいづちとするものである。

M2 「今の伊勢丹あたりはもう原っぱなんちゃって」

F2

「イセタンアタリワネ」(山の手グループ)

⑪「繰り返し」系のあいづちの具体例をみると、名前、地名などの固有名詞や動詞句が多い。これは「相手の言ったことをくりかえすことで、情報を正確に受けとろうとする」(佐久間、杉戸、半澤1997)聞き手の態度を表明するものといえよう。

⑪「その他」の主なものは、「ホント」「ヤッパリ」「ナルホド」「イヤ」である。これらを「その他」に入れたのは、使用における個人差が大きかったためである。「ヤ」「イヤ」は次のような場面で使われていた。

司 「どうもお初にお目にかかります。水谷と申します。今日はひとつよろしくどうぞ。」

M2 「イヤ」

M3 「イヤ」 「イヤ」 (船場グループ)

反復形を取りにくいあいづちは、「繰り返し」などにみるように実質的な発話に近いものが多いといえよう。

3.2. イントネーション

あいづちの、他の発話に稀な特徴的な表現は反復形である。語形の反復形にともないイントネーションも同様の反復パターンを示すことに注目して、これらのあいづちについてイントネーションを調べ、単一形のものと比較して示した。自然な談話中のあいづちは声の重なりが多く、基本周波数の抽出がたいそう困難であるが、ここでは比較の声が大きく抽出が可能な山の手の男性話者M2の発話の中から、ピッチ曲線を抽出し、あいづちの発話にみるイントネーションの特徴と基本周波数の最高値にも注目した。

図1はM2の発話から抽出したピッチ曲線である。

この話者の場合、ピッチ曲線の最高値は大きく分けて、低(80-100Hz前後)、中(120Hz前後)、高(180-200Hz前後)の3段階の音域に分かれる。

図1の1-1, 1-2, 1-3, 1-4にみられるように、「ソー」「エー」「アー」「ハア」などの基本形の短いあいづちの大部分は、低い音域に基本周波数の最高値を持ち、ゆるやかに下降するイントネーションで発話されている。これら4種のあいづちのイントネーションは基本的に同一パターンであることが観察される。「ソー」には強く短く低く発話されるものや、うなるように発話されるものなどバリエーションが多く、低い音域を含むものはほとんどこのタイプのあいづちであった。

図1の2-1から2-4, および3-2は、中の音域にあり、「ソーソー」「ハアハア」のような反復形のあいづちである。長いものは通常高い音域から始まり、ゆるやかに下降する。同じように反復を伴うものでも、一つ一つの音形がはっきり発話されているものと、そうでないものがあるが、その違いはピッチ曲線にも認めることができる。

図1の3-1の「ソーソーソーソー」は高い音域に属している。とくに高く始まって次第に下降し、声の高さと「ソー」の反復によって積極的な同意を表現している。また、図1の4-1にみられる普通の「笑い」も他の反復形と共通したピッチ曲線を示している。女性話者の発話に対して迎合するような、あいそ笑いで応答することがある。そのような笑いでは、図1の4-2のようにピッチ曲線が下降する代わりにゆるやかなアーチ状になるのが特徴である。この場合の笑声も明らかに好意的な同意を表すあいづちである。

これら「反復形を持つあいづち」のイントネーションに関わる特徴は、東京、大阪ともに基本的には同じであった。しかし、イントネーションが両方言で異なるものとしては「反復形を取りにくいあいづち」の「アソーデスカ」系がある。ここでは割愛したが、ピッチ曲線をみると、東

京では「ソー」の部分のはじめが高く、続いて下降音調がみられるものがあり、聴取によればその種のは圧倒的に多かったが、反面「ソーデスカ」のように長音の部分が高く、つまり、はじめから上昇調が現れる発話もしばしば使われていた。これに対して大阪では「アソーデッカ」「アソーダッカ」のように平板な発話が一般的であった。

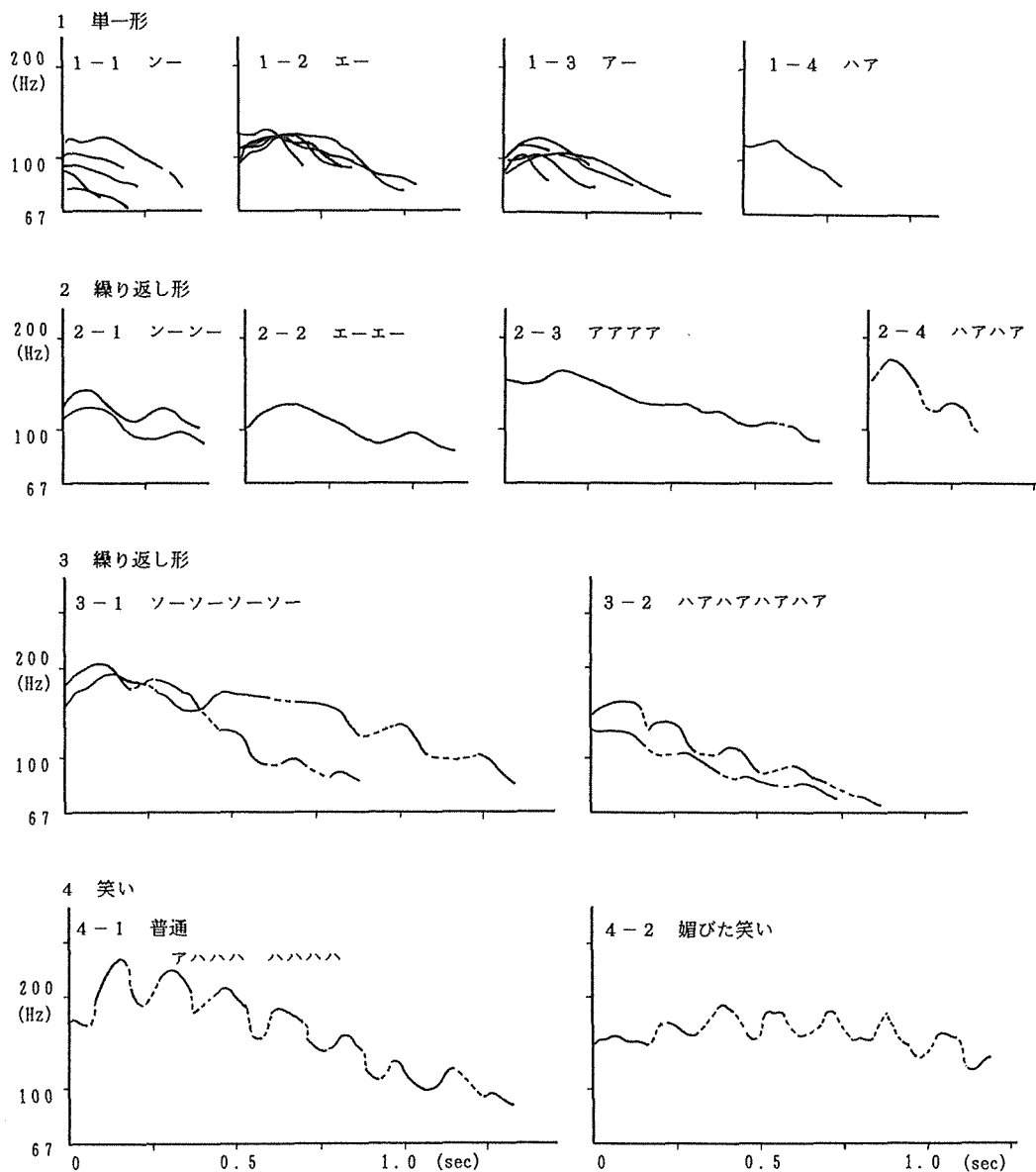


図1 あいづちの種類とそのイントネーション

4. あいづちの頻度とその種類

4.1. あいづちの頻度

今回の資料には各グループそれぞれ話者4人と司会者の合計5人、4グループで合計20人（ただし同一司会者が2グループの司会をした）による使用延べ数計2870のあいづちが観察された。

表3はあいづちの頻度をその使用の多い順に、標準偏差値とともに上述の分類に従って示したものである。

表3 あいづちの頻度

グループ名 あいづち の系統	東 京		大 阪		司 会 者 (4つの座談 会の合計)	総 計 (標準偏差)
	山の手 グループ	下 町 グループ	船 場 グループ	河 内 グループ		
ンー系	145	201	37	140	65	588 (37.8)
アソーデスカ系	82	74	19	103	91	369 (14.0)
アー系	45	48	54	99	99	345 (12.1)
エー系	49	59	52	58	112	330 (18.4)
ハイ系	63	37	18	12	183	313 (19.7)
笑い	126	63	35	41	29	294 (12.4)
繰り返し	37	44	22	86	29	218 (7.9)
ハヘホ系	3	7	43	66	85	204 (15.5)
ソー系	13	18	11	46	5	93 (7.5)
ネ系	9	19	9	28	12	77 (3.7)
その他	2	10	19	1	7	39 (3.1)
使用延べ数計	574	580	319	680	717	2870

それぞれ約45分間の4つの座談において使われたあいづちの話者別使用延べ数は最大284個（河内 M1）から最小39個（船場 M3）まで、また司会者のあいづちも380（河内 MS）、182（船場 OM）、82（山の手 SS）および73（下町 SS）とかなりの違いがみられた。司会者を除く16人の話者の平均あいづち数は134個であった。とくに明記すべきことは東京下町の男性話者 M1 の「ンー」系あいづちの多用であり、これが標準偏差値にも現れている。

4グループで司会者を除くあいづちの総数は574（山の手）、580（下町）、319（船場）、680（河内）で、4人の話者が親しい間がらの船場グループではあいづちの少なさが目立つ。表1に示したように東京の山の手と下町は、司会者が同一であり、話者は男女半々で男性同士、女性同士は知り合いであるが、それぞれは互いに初対面である。このように司会者、話者の条件が同一であるからこれらの資料は比較には有利である。検討の結果は、両グループの司会者および話者別のあいづち数が酷似している。

4.2. 話者別のあいづち数と種類

図2(1)～(4)は、各グループごとに話者別のあいづち数とその種類をグラフにしたものである。あいづちの種類をみると山の手と下町の司会者（同一人物）が6～7種と少な目であるが、それ以外の話者および司会者のほとんどが9種前後、最大11種を使い分けているのがわかる。この点において東京と大阪で、あるいは山の手と下町、船場と河内の間で、また男女の間でも目立った違いはみられない。本稿では使用異なり数を系列として数えたが、もし「ソー」「ソーソー」、「アソー」「アソーデスカ」のように表現形式の違うものをすべて別個に数えれば、一人あたりの使用異なり数ははるかに多くなるはずである。

4.3. 反復形をとるあいづちの占める割合

規則的な反復形を持つあいづちの中で笑いを除く「ソー」「ハイ」「エー」「アー」「ソー」系について、実際に反復形の現れる割合を調べてみた。司会者も含めた総合頻度ではこれら5系のあいづちの合計1669中195回、およそ12パーセントの割合で反復形が使われていた。内訳をみるとまず、司会者がほとんど反復形を使わないことが観察された。司会者 SS は山の手グループでは「ハアハア」の1回、下町グループの時は「ハイハイ」「ハイハイハイ」「エーエーエー」の3回、また船場グループの司会者 OM は「ハイハイ」を2回使用したのみである。これに対して河内グループを担当した女性司会者 MS は合計25回の反復形を使用していたが、MS は積極的に談話に参加しているため、司会者としては例外的である。

表4は系列ごとに反復形として現れたあいづちの割合を、各グループ別に示したものである。まず、いずれのグループにおいても「ソー」系のあいづちの反復数が多いことが観察される。次いで多いのが「ハイ」系と「ソー」系で、「エー」系や「アー」系になると反復形で使われる頻度はずっと落ちる。これらの点においては4グループとも共通である。また「ハイ」系では下町と河内グループで反復形の頻度が高いことがわかる。

表5は具体的な反復の回数を割合で示した結果である。ただし、「エー」系と「アー」系に関しては頻度自体が低いので省略した。これをみると反復の回数は2回までが多く、3回を超えたものは少ない。例外的に「ソー」系では反復回数が多く、下町と河内でおおよそ半分、山の手と船場はそれぞれ100%、80%と非常に高い割合になっている。

表6は反復形の割合を男女別に調べた結果である。左の数値が、各話者のすべてのあいづちに占める反復形を持つあいづち（ただし変則的反復するものおよび「笑い」は含まず）の割合で、右の数値がその中で実際に反復形の占める割合である。これをみると個人差は認められるものの、男女別にはっきりした違いは認められない。この8人の話者の中で、最もことばづかいの丁寧な話者は、山の手グループのM1とF2であったが、この2人は、反復可能なあいづちと実際の反復形の割合ともに値が低いことが認められる。

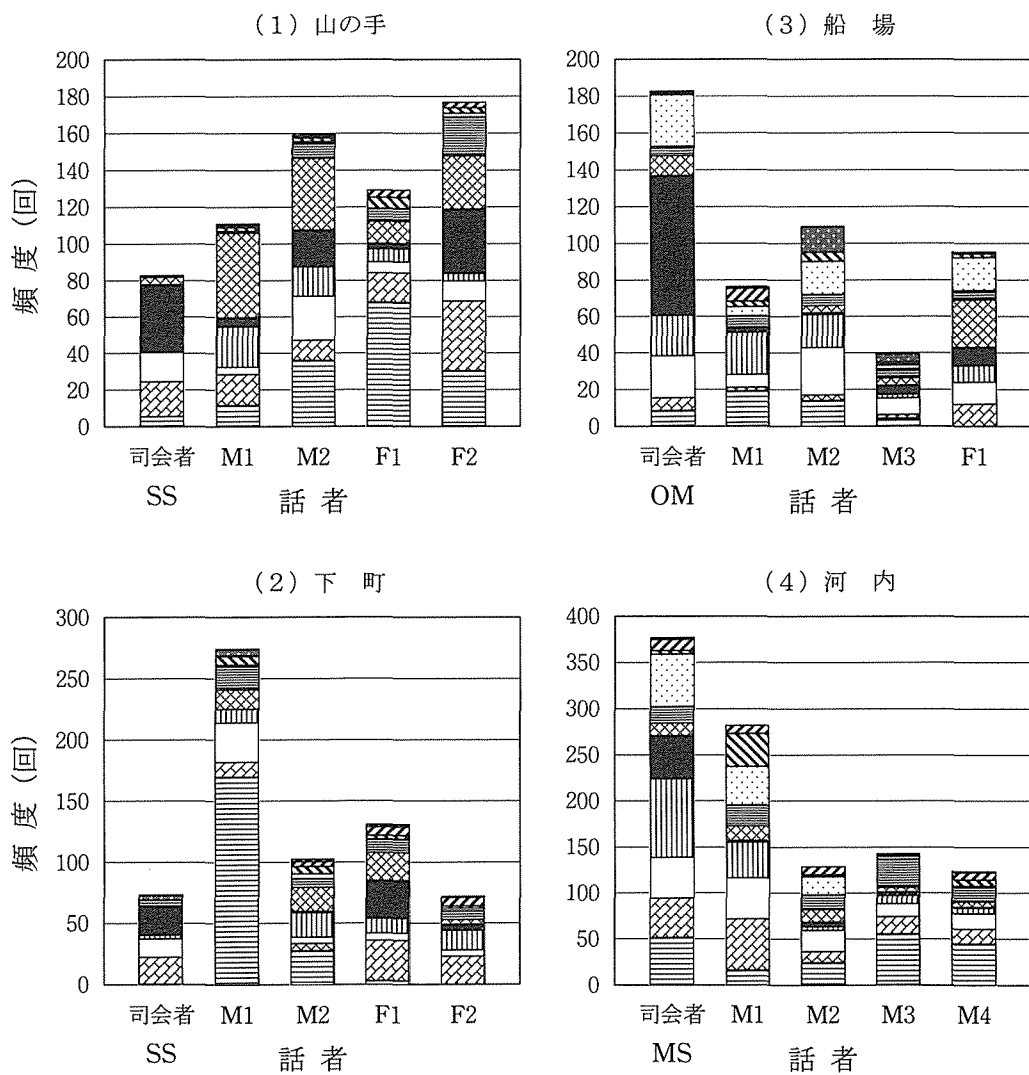


図2 4グループの座談における話者別のあいづちの種類と頻度
(Mは男性, Fは女性)

- (1) 東京山の手
(2) 東京下町
(3) 大阪船場
(4) 大阪河内

表4 グループ別、各系列における反復形あいづちの占める割合

グループ 系 列	山の手	下 町	船 場	河 内
ソー系	62%	61%	45%	48%
ハイ系	24%	49%	11%	42%
ソー系	8%	13%	19%	12%
エー系	4%	5%	8%	0%
アー系	2%	4%	4%	1%

表5 反復形あいづちの中で、反復数3回以上のものが占める割合
（「アー」と「エー」についてはデータ数が少ないので省略）

グループ 系 列	山の手	下 町	船 場	河 内
ハイ系	26%	17%	0%	0%
ソー系	0%	30%	0%	41%
ソー系	100%	45%	80%	48%

表6 男女別「ソー」「エー」「アー」「ハイ」系あいづちの占める割合
（ ）内は反復形の占める割合、Mは男性、Fは女性。

話 者 グループ	M 1	M 2	F 1	F 2
山の手	55% (3%)	69% (17%)	82% (12%)	69% (3%)
下 町	85% (16%)	64% (6%)	67% (22%)	71% (8%)

4.4. 反復形の特徴

反復形の例は多く、一般的な形であるが、中でも「ソー」系が多く用いられる。反復を重ねることによって同意の程度が強調され、イントネーションもはじめが高く次第に下降し、声の高さによっても強調がなされている。反復形は東京、大阪において形式もイントネーションにも違いはみられなかったが、司会者の使用は稀であり、東京では、ことばづかいが丁寧な話者では使用例が比較的少ない。つまり、反復形はあらたまった表現ではないことを示している。

5. あいづちの種類とその運用

5.1. 司会者と話者

司会者はその役割からある程度あらたまったあいづちを使用することが予測される。しかし司会者のあいづちが他の話者のあいづちと決定的な違いがあるかについては明らかでない。

図2のグラフから各司会者のあいづちを比較してみると、男性司会者のSSとOMのあいづちが女性司会者MSのものとその種類や頻度においてかなり異なることがわかる。これはSSとOMが談話の進行役としての司会者であったのに対し、MSが初対面ばかりの河内話者の中に積極的に入って談話を盛り上げるというタイプの司会者を演じていたためと思われる。

司会者に共通したあいづちをみると、まずあげられるのは「ハイ」系の多用である。「ハイ」の他には「アー」があげられるが、SSは「アー」がほとんどで「エー」はなく、OMは両者ほぼ同じ、MSは「エー」の方が多いという違いがあった。SSは「ハイ」「アー」に「アソーデスカ」を加えた3種を、OMは「ハイ」「アー」「エー」に「ハヘホ」系を加えた4種を多用している。女性司会者のMSは「ハイ」「アー」「エー」「アソーデスカ」「ハヘホ」に「ンー」系も加えた計6種を多用している。

司会者のあいづちには「ソー」「ソーソー」や「ネ」のようにくだけたものではなく、また「ハイハイハイ」のような反復形のあいづちもMS以外は皆無に近かった。しかし同時に司会者のあいづちには、山の手の話者にみられるような「アソーデゴザイマスカ」「アソーデラッシュイマスカ」のようなより丁寧な形式も出てこない。また司会者はすべての話者に対して平等である傾向が強く、相手が知己であるかどうか、あるいは男であるか女であるかなどによる使い分けもしていなかった。

以上のことから、話を引き出したりまとめたりする役割をになう司会者のあいづちは「ハイ」「アソーデスカ」「アー」「エー」などあらたまった、かつビジネスライクなものが多く、「ソーソーソー」などのように感情を強く出したものやなれなれしいもの、くだけたものはない、と結論づけることができよう。このため司会者は、概してあいづちの種類が座談会の他の話者よりも少なくなっている。

司会者のあいづちの特徴と並行して、司会者に対して使われるあいづちの特徴も観察するために、各グループから冒頭の司会者の導入部分で使われるあいづちを調べてみた。対象としたのは、司会者の発話の始まりから話者自身による自己紹介、あるいは実質的な会話の始まりまでである。下町グループは男性話者M1のみが司会者に対してあいづちを返しており、合計26個の「ンー」系と2つの「アー」、そして「エーエーエーエー」を1回使っている。山の手グループは男性話者2人が主となってあいづちを打っており、その内訳は話者M1が3回の「アソーデスカ」、話者M2が「ハイ」系を10回使っている。船場グループは男性話者M2が主となって「アー」「アソーデスカ」「ハイ」それに「イヤ」を交えて15回のあいづちを打っている。河内グループは2人があいづちを打っているが、その主なものは「ハイ」系、「アソーデスカ」系、および「アー」系であり「ンー」の1回を加えて、合計14回である。4グループを比較すると、下町の話者M1を例外とすれば、他では「ハイ」「アソーデスカ」「アー」を多用する点や、あいづちの頻度においても似通っている。

以上のことから、座談会の参加者が司会者に向けて打つあいづちは、司会者が多用するあいづちと原則的に同じということがわかる。とくに「ハイ」「アソーデスカ」はややあらたまった場面におけるあいづちということであろう。

5.2. 方言差および同一方言内の地域差

あいづちの表現形式の具体例をみるとまず、「反復形を持つあいづち」(表2-1)にみる規則性が、東京と大阪でまったく同一である。またこれらの表現形式に伴うイントネーション、あるいは頻度において、東京と大阪、あるいは山の手と下町、船場と河内といった地域間でほとんど違いがみられない。

方言差が顕著に現れるのは、表2-2にまとめた「反復形を取りにくいあいづち」である。まず、あいづちとして東京で使われる終助詞の「ネ」「ネエ」が大阪で「ナ」「ナア」の形態になることが多く、それが「アソーデスカ」「繰り返し」「その他」のあいづちの末尾にも頻繁に使われている。次に「アソーデスカ」系には方言の多彩なバリエーションがみられ、下町の商家に特有の「サイドスカ」や大阪河内の「アソーヤロネ」では、「ソー」が「サイ」や「ソヤ」になっている。その他では、「ソー」に続く部分のバリエーションとして違いが現れるものが多く、「ダッシャロナ」「デンナ」など、大阪特有の表現が数多く現れている。

丁寧な表現としては「アソーデゴザイマスカ」「アソーデラッシャイマスカ」(山の手)「サヨデゴザイマスカ」(下町)「アソーデッカ」(船場)「ソーデオマッシャロナア」(河内)などが使われている。船場ではすべて「デッカ」が、反対に河内では「ダッカ」の方がよく使われ、また河内では「ソー」を省略したと思われる「ダッシャロナ」「ダンナ」などの形もしばしば現れている。

使用頻度についてみれば、総合で一番多いのが「ソー」であり、その次に「アソーデスカ」「アー」「エー」「ハイ」と続く。「ソー」が一番多かったのは山の手、下町、および河内で、船場では「エー」と「アー」がほぼ同じで一位、司会者では「ハイ」が一番多かった。山の手と下町では、「ソー」を除く大部分のあいづちの頻度が似ている。

東京では「ハヘホ」系の感嘆のあいづちが少ない。「ハイ」「ハア」の表現形式はすべてのグループに現れているが、大阪では使用頻度が極めて低い。河内グループでは男性話者4人全員がごく少数ではあるが(45分中12回)「ハイ、ハアハア、ハイハイ」などを使用している。これらはすべて司会者(女性)に対してであり、また大半が座談会のはじめの司会者の導入に対して打たれたあいづちであった。これに対して同じ大阪でも船場話者は、顔なじみの知人にも「ハイ」「ハア」を使用している。ただし頻度は18回と少なく、うち女性話者F1が10回を占めていた。

以上のことから大阪では「ハイ、ハア」があらたまった場面に使われていることが推測される。山の手と下町グループを比べると、男性話者にその差が顕著であった。下町では「ハイ」系が男性話者に皆無で、反対に「ソー」系が女性話者に皆無である。山の手グループではこのどちらも男女両方に使われている。また山の手グループは男性話者も丁寧で「…ゴザイマス」などのフォームを使うが、下町の男性話者には「…デゴザイマスカ」タイプのあいづちが皆無であり、ほとんどが「アソー」などのくだけた表現形式であった。また山の手的女性は「アー、エー」系の使用が少ない。

山の手と船場、下町と河内という観点に基づいてみると、まず男性話者が山の手・船場のグループでは下町・河内グループに比べて「ソー」などの比率が低く、丁寧なあいづちを使用している。船場の話者は全員が知人であり、河内は全員初対面であったことを考慮すると、その差はより大

きな意味を持つといえよう。また、あいづちに関する男女差では、山の手グループよりも下町グループにその違いがはっきり出ている（図2参照）。

上記は中・高年話者の座談という限られた資料からではあるが、従来の研究ではほとんど触れられることのなかった方言差、および社会言語学的観点からみたあいづちの特徴の一端が明らかになった。

5.3. 男女差および親疎の関係

5.3.1. 男女差

表現形式に現れる男女差は、上記方言差と同じく「アソーデスカ」系のバリエーションにみることができる。「ソーカシラ」「ソーナノ（ヨ）」「ソーネ」（山の手、下町）のように「ソー」に続く部分に、また「アラソーデッカ」（船場）の「アラ」のような間投詞に、女性特有の表現が現れている。

図2には使用頻度を示しているが、ここで女性話者に目立つのは「アソーデスカ」系と「ハイ」系の占める比率である。5人の女性話者のうち3人が「アソーデスカ」系のあいづちを最も多く使用していた。反対に11人の男性話者のうちで「アソーデスカ」系が使用頻度で一番多かったのは、河内のM1である。また男性は女性に比べて「ソー」系「アー」系および「エー」系のあいづちの使用が多い。「ハイ」系と「アソーデスカ」系のあいづちは司会者によって、また司会者に対して用いられるあいづちの代表的なものでもある。今回の座談では、女性は男性に対して、よりあらたまったあいづちを使用したといえる。

5.3.2. 親疎の関係

東京の山の手と下町グループでは男性同士、女性同士が幼なじみの友人で、他とは初対面である。このため各話者は親疎の関係において、また男女の違いにおいて、異なる相手と話し、あいづちを打つ機会があったことになる。そこで親疎の関係があいづちの運用に与える影響については、東京の2グループを主として分析した。

あいづちの種類をみると、各話者が9種類前後のあいづち系をレパートリーとして所有しているのがわかるが（図2）、その運用について談話の流れを追いつながりながらみてゆくと、相手によってかなりはっきりした使い分けがなされていることが認められた。たとえば「アソーデスカ」の使用については、友人である女性には「アソー」「ハソーナノ」などの表現形式を使い、座談会で初対面の男性には「ソーデゴザイマスネ」と丁寧な形を用いている。感嘆の「へー」なども友人に対して使われることが多い。

相手別あいづちの種類を調べた8人のうち7人までが何らかの形で相手による使い分けをしていた。初対面の人（司会者も含む）には「ハイ」や「アソーデスカ」であるのに対し、友人には「ソー」「ソーソー」などのくだけた表現を使用している。「アー」や「笑い」のあいづちも比較的あらたまったものと捉えることができる。例外は下町の男性話者M1で、使い分けがまったくみられなかった。図3は、山の手グループの女性話者F2と男性話者M2のあいづちを、相手別にグラフ化

したものである。ここでは違いをよりはっきりさせるために、「アソーデスカ」系を「丁寧」として「アーソー」のような「ぞんざい」な形態と分け、「ソー」系のものはすべて「ぞんざい」の方に入れた。

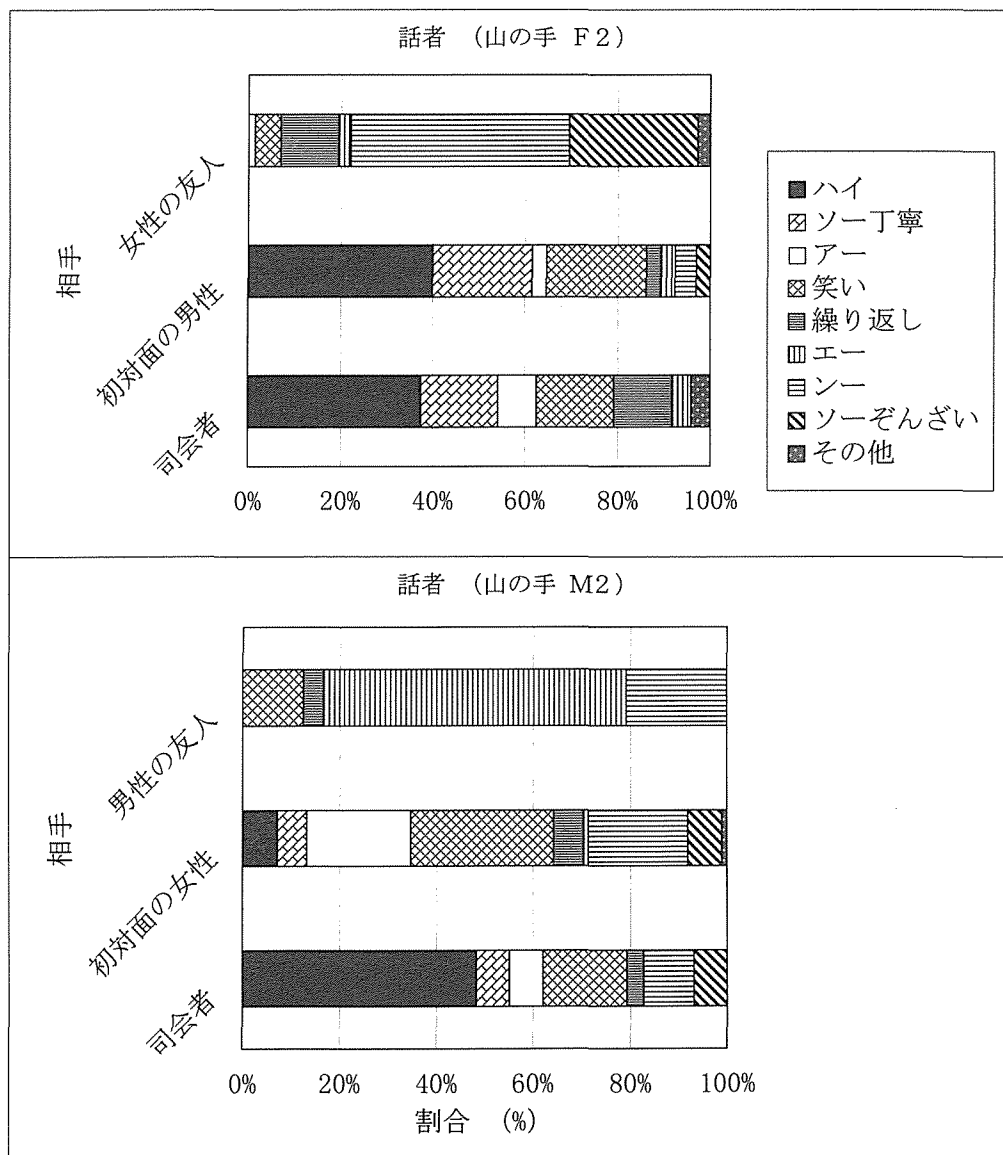


図3 相手別あいづちの種類と使い分け例 (山の手 F2 および M2)

女性話者 F2 のあいづちの種類をみると、友人の女性話者 (F1) に対する場合と初対面の男性や司会者に対するあいづちがまったく違うことが認められる。初対面の男性話者 (M1 および M2) に対するものと、司会者に対するあいづちの種類と頻度はほとんど同一といってもよい。つまり友

人にはもっぱら「シー」系と「ぞんざいなソー」を使うが、他者には「ハイ」系、「丁寧なソー」と「笑い」が多い。

一方、男性話者 M2 のあいづちは、友人の男性話者 (M1) に対する場合、司会者や初対面の女性話者 (F1 と F2) に対する場合とでは 3 種のパタンが観察される。つまり友人の男性には「エー」が圧倒的に多いが、司会者に対してはもっぱら「ハイ」であり、女性には「アー」「笑い」「シー」である。

上図の女性話者 F2 にとっては司会者と参加者の男性は、ともに「初対面であり、男性である」という 2 点にしぼられ、司会者という役割を意識した使い分けをしていないといえる。これに対して下図の男性話者 M2 は、同じように初対面でも、司会者 (男性) に対する場合と、談話をかわす女性に対してでは、はっきりとした使い分けがある。話者 M2 は、司会者に対して「ハイ」が多いが、これは司会者という役割に対するものであるのか、あるいは初対面の男性 (女性ではなく) に対するものであるためか、本資料からは断定することができない。ただ、談話全体を聞いた印象では、話者 M2 は、相手が談話の進行役を務める司会者ということを意識している可能性が強い。

実際に使われるあいづちの選択については、たとえば「ハイ」と「シー」は山の手、下町グループともに、友人に対してたとえば「シー」は使うが、「ハイ」「ハア」や「アソーデスカ」の丁寧形が使われた例は皆無であった。このようにあいづちの使用には男女間の、また、親疎の差によるなど、位相の違いが明白に現れた。

6. むすび

この稿では、日本語のあいづちについて東京、大阪計 4 グループの座談資料を分析し、次の点を明らかにした。

(1) 抽出された 3000 近いあいづちの具体例に基づき、それらを 11 種類に整理したうえで、「反復形を持つあいづち」と「反復形を取りにくいあいづち」の 2 つに分類した。また、「反復形を持つあいづち」についてはピッチ曲線を示して、このタイプのあいづちに伴うイントネーションに一定の型があることを明らかにした。

(2) 11 種類のあいづちの使用頻度を、東京 (山の手と下町)、大阪 (船場と河内) 計 19 人の話者および司会者について調べた。あいづちの使用頻度には個人差が多いが、種類については 19 人の話者全員が系列として 8～11 種類のレパートリーを持っていること、また、概して司会者のレパートリーは少ないことがわかった。

(3) 「反復形を持つあいづち」には表現形式やその運用に方言差が少なく、「反復形を取りにくいあいづち」には方言差や男女差がみられ、親疎の関係が与える影響も大きいことが明らかになった。

会話の達者な年配者による 2 方言の談話を分析した結果、「反復形を取りにくいあいづち」には方言差や男女差、親疎の差、あらたまりの度合いなどの社会言語学的要因が働いた。この場合は世代差も大きいと推測される。一方、「ソーソー」などの「反復形」には、東京と大阪のように語

彙が大きく異なる方言間においても違いはみられなかったが、あらたまった発話では使用されない傾向があった。しかし、この種のあいづちは、現在の若い世代にも使用される基本形と考えられ、実質的な表現でない「あいづち」の特性が現れているといえよう。ここでは多彩なあいづちの実態を明らかにすることができた。

今後はあいづちの発話の音声的特徴をタイミングも含めてより詳細に観察して談話の本質に迫る研究を継続したいものと考えている。

付 記

この談話資料は、江川清氏、杉戸清樹氏、米田正人氏等により綿密に検討し準備して録音、録画された資料であり、しかもそれぞれごく自然な談話音声収録されている。東京と大阪という2大方言を総括する談話研究の材料としても優れた資料である。今回は4種類の音声資料を扱ったが全体では6種類あり、司会は杉戸清樹氏、水谷修氏、および杉藤が担当したものである。

今回この資料を扱うにあたり、江川清氏、磯部よし子氏には当方に欠けていた資料の提供をいただき、杉戸清樹氏には文献の提示をいただいた。心からの謝意を表したい。

なお、この稿はNagano-Madsenが国際交流基金のフェロー研究員として来日、1997年9月から1年間音声言語研究所において、杉藤の指導によりともに研究を行った成果である。

参考文献

- 江川 清 (1987a) 「身振り・動作の現れ方」『談話行動の諸相』159-179, 国立国語研究所, 三省堂
江川 清 (1987b) 「研究の方法」『談話行動の諸相』62-67, 国立国語研究所, 三省堂
黒崎 良昭 (1987) 「談話進行上の相づちの運用と機能, 一兵庫県滝野方言について」『国語学』150, 15-28, 国語学会, 武蔵野書院
小宮 千鶴子 (1986) 「あいづち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』43-62, 大東文化大学語学教育研究所
佐久間まゆみ, 杉戸清樹, 半澤幹一 (1997) 『文章・談話のしくみ』おうふう
杉戸 清樹, 磯部よし子 (1987) 「資料について」『談話行動の諸相』190-192, 国立国語研究所, 三省堂
杉戸 清樹 (1987) 「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相』68-106, 国立国語研究所, 三省堂
杉戸 清樹 (1989) 「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち—談話行動における非言語的表現—」『日本語教育』67, 48-59, 日本語教育学会, 凡人社
杉藤 美代子 (1987) 「ポーズとイントネーション」『談話行動の諸相』107-138, 国立国語研究所, 三省堂
杉藤 美代子 (1993) 「効果的な談話とあいづちの特徴及びそのタイミング」『日本語学』12巻4号, 11-20, 明治書院
堀口 純子 (1991) 「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』10巻10号, 31-41, 明治書院
水谷 信子 (1983) 「あいづちと応答」『話しことばの表現』37-44, 筑摩書房
水谷 信子 (1984) 「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古希記念論文集』第2巻, 261-279, 三省堂
メイナード泉子 (1987) 「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言語』16巻12号, 88-92, 大修館書店

米田 正人 (1987) 「コミュニケーションネットワーク」『談話行動の諸相』148-158, 国立国語研究所, 三省堂

(投稿受理日: 1998年7月8日)

(改稿受理日: 1998年9月29日)

Yasuko NAGANO-MADSEN (ヤスコ・ナガノ・マドセン)

音声言語研究所 (1997年9月~1998年8月)

Department of Oriental and African Languages, University of Gothenburg,
Humanisten,, 41298 Gothenburg, Sweden

杉藤 美代子 (すぎとう みよこ)

音声言語研究所 631-0014 奈良市朝日町2-10-4

HQK00661@nifty.ne.jp

Analysis of back channel items in Tokyo and Osaka Japanese

Yasuko NAGANO-MADSEN

Institute for Speech Communication Research / University of Gothenburg

SUGITO Miyoko

Institute for Speech Communication Research

keywords

back channel items, reduplication, intonation, dialectal variations, sociolinguistic factors

In this paper, we investigated characteristics of back channel items in Japanese by analysing four dialogues by native speakers of the Tokyo and Osaka dialects. The dialogues, each of which has four speakers, were recorded by researchers of the National Language Research Institute. Some sociolinguistic factors such as intimacy and the speaker's sex had been taken into consideration in organizing the groups.

From the analysis of approximately 3 hours of recording, nearly 3000 back channel items were extracted. They were classified into 11 classes according to forms as the main criterion. Furthermore, the items belonging to the 11 classes were divided into two main categories: (1) those that can form reduplicated counterparts and (2) those that do not usually reduplicate. Regularities of the intonational patterns of the items which belong to category 1 are also shown in their fundamental frequency contours. Neither the patterning of the reduplicated forms nor their intonation patterns differed between Tokyo and Osaka.

The frequency analysis revealed that the majority of the back channel items in Japanese belong to category 1. Forms which reflect dialectal and sociolinguistic factors were concentrated in the items in category 2, which appeared to be more substantial utterances.

All the speakers were found to possess 8-11 classes of back channel items, while the exact rules of their usage were controlled by sociolinguistic factors such as intimacy, formality, and the speaker's sex.